

平成 17 年度全国優良畜産経営管理技術発表会

《審査講評》

審査委員長 横溝 功

今年度は 20 道県の地方審査委員会より、酪農 11 事例、肉用牛繁殖 2 事例、肉用牛肥育 6 事例、肉用牛一貫経営 2 事例、養豚 2 事例、採卵鶏 4 事例、組織・グループ活動 2 事例の計 29 事例の推薦があった。個性ある立派な経営が多く、審査委員会では苦勞し、一部について評価が分かれたことから、投票によって決定したことを報告する。

これら推薦事例について、第 1 回審査委員会で書類審査を行い、最優秀賞、優秀賞候補として 12 事例を選考した。そして、12 事例全部について、書類内容で把握できなかった項目、審査上で必要な項目について現地確認を行った。第 2 回審査委員会及び先ほどの発表内容を受けて、最終的に審査委員会を開催し、最優秀賞 4 事例、優秀賞 8 事例を決定した。

審査基準は例年と大きく異なることはないが、今年も昨年同様に畜種別の垣根を取り除き、生産性、収益性等の経営実績、それを支える経営管理技術や特色ある取り組み等について審査を行った。とくに今年は、個別経営の実績・取り組みの評価にとどまることなく、地域資源の有効活用、環境にやさしい畜産、消費者から信頼される畜産物の提供など、地域社会との良好な関係にも十分に考慮した選考を行った。

それではまず、最優秀賞 4 点を発表する。

- 1 点目は、秋田県由利本荘市の柴田輝男、誠子さん（酪農経営）。
- 2 点目は、北海道沙流郡平取町の佐藤 貢、雪子さん（肉用牛一貫経営）。
- 3 点目は、神奈川県三浦郡葉山町の三留 武さん（肉用牛肥育経営）。
- 4 点目は、神奈川県横浜市の有限会社横山養豚（養豚経営）である。

また、このほか 8 事例は優秀賞と決定した。

それでは、評価の根拠となった事例の概要を申し上げたい。

最優秀賞・農林水産大臣賞

秋田県由利本荘市 柴田輝男、誠子さん（酪農経営）

柴田さんの経営は、秋田県西南部の由利本荘市の雄大な鳥海山麓にある。

柴田輝男さんは、学校卒業後、北海道で研修し、牛作り・草作りの基本を学んだ後、昭和 47 年に柴田家へ婿養子に入っている。現在の労働力は、柴田さん夫妻、二女、2 人の常雇である。経産牛 71 頭、育成牛 30 頭の乳牛、E T 和牛 20 頭を飼養し、2,268 万円の農業所得をあげている。

以下、経営の評価すべき特徴点をあげる。

第 1 に、家畜飼養面において、「家族が健康で経営を営む」をモットーにして、無理な増頭を行っていないことである。そして、経営成績の向上につながる様々な工夫を施している。輝男さん自らが人工授精を行い、受胎に要した種付回数 1.4 回という良好な成績を収めている。また、家畜個体識別モデル事業に積極的に取り組み、生乳においてもトレーサビリティできる仕組み作りを、全農秋田に働きかけている。さらに、牛群検定成績を積極的に活用し、牛群の改良に役立てており、秋田県での牛群検定農家率向上にも意欲的に取り組んでいる。E T 和牛にも取り組み、和子牛売上高の半分を二女の収入にするなど、役割分担を明確にし、家族のやる気を引き出している。また、障害者の雇用を積極的に行っていることは評価できる。

第 2 に、飼料作面において、鳥海山麓の草地 39 ha を活用し、オーチャード・チモシー混播の半乾サイレージを積極的に作っている。草地は、由利本荘市の土地を 10 a 当たり 1,200 円で借地する形態であるが、ほ場をできるだけ団地化し、ほぼワンマンでの作業が可能な作業体系にしている。従って、農機具の移動時間が極めて短くなっている。所有水田は、地域のコントラクターに委託し、稲発酵粗飼料を作ってもらっている。これについては、嗜好性は良いが、障害がでないように、搾乳牛に少しずつ供与するなど、飼料の給与方法に工夫をこらしている。その結果、家畜飼養頭数が多いにもかかわらず、粗飼料自給率が 7 割にも達している。

第 3 に、畜舎を自ら建築するなど低コスト化を目指し、経産牛 1 頭当たり借入金残高が 24 万円と極めて財務が健全であることである。この借入金残高には、9 頭的全農の乳牛貸付事業による債務と、経済事業の購買未収金までも含まれているので、いかに健全であるかが分かる。

第4に、牛舎内の敷料に、酪農では珍しくカンナクズ、オガクズ、時期によってはモミ殻をふんだんに使い、ふん尿混合でバークリーナへ出し、堆肥舎で堆積発酵させている。それ故、堆肥舎に搬出された段階で、水分調整ができており、比重も良いので、発酵がスムーズに進み、良質のたい肥生産が可能になっている。幸いなことに、当該地域では、日本海側の砂地の地域でイチジク産地や、アスパラガスの産地ができており、柴田経営のたい肥に対する需要が旺盛である。ちなみに、製品たい肥の60%が耕種農家への販売で、40%が草地への散布になっている。

第5に、昭和60年には、菜の花を山に植えて、50の幼稚園・保育園に鑑賞を勧誘する手紙を出し、17校が来場している。園児に、カブトムシの幼虫を無償であげるなど、交流を積極的に進め、畜産に対する理解の醸成に努めている。

第6に、家族経営協定を締結し、夫妻で認定農家になっている。大型投資などの最終的な意思決定に、家族全員の意見が反映されるところに斬新さがある。

今後、さらに二女の夫も就農予定であり、今後一層魅力ある経営の構築を期待したい。

最優秀賞・農林水産大臣賞

北海道沙流郡平取町 佐藤 貢、雪子さん（肉用牛一貫経営）

佐藤さんの経営は北海道日高支庁管内の西部の平取町にある。

現在の労働力は、佐藤さん夫妻、長男である。黒毛和種の繁殖牛100頭、育成牛10頭、子牛80頭、肥育牛160頭、牧牛1頭を常時飼養し、2,158万円の農業所得をあげている。

以下、経営の評価すべき特徴点をあげる。

第1に、家畜飼養面において、最終生産物である肥育牛のターゲットが低コストの大衆牛肉（A3）と明確なことである。これは、農協をはじめとする地域としての取り組みに沿ったものである。繁殖牛は子牛付きの母牛のみ舎飼であるが、基本的には年中屋外飼養方式である。

なお、放牧による発育のバラツキは、連動スタンションの設置や哺乳ロボットを導入などにより防いでいる。平成11年に人工授精師の資格を有する後継者が就農後は、人工授精のウェイトを高め、増体型の繁殖母牛資質改良を図っている。現状は、6割

が人工授精、4割が牧牛による。

第2に、飼料作面において、採草放牧面積が73haを超え、家畜の飼養頭数が多いにもかかわらず、粗飼料自給率100%を達成している。その結果、購入飼料費を低く抑え、肥育もと牛を安価に生産し、出荷肥育牛1頭当たりの生産原価62.3万円と低コストの和牛生産システムを構築している。

第3に、販売面において、「びらとり和牛」ブランドの維持のため、全頭肥育牛での出荷である。それ故、肥育もと牛での出荷はない。ちなみに、肥育牛は全頭ホクレンを通じて、相対でコープさっぽろに販売している。なお、コープさっぽろのホームページには、生産者の概要や飼育の概要などが詳細にアップロードされており、生産者と消費者の間に強い信頼関係が構築されていることが分かる。

第4に、環境面では、堆肥舎を2カ所に設置し、堆積発酵ののち全量を牧草地に還元している。平成13年にグラスタニー症が発生したが、土壌分析の結果、たい肥の過剰還元ではなく、Mg、Ca不足によることが判明し、苦土炭カルを適切に施用している。

畜舎用地が広く、牛舎・施設が分散して、作業動線にロスが生じているので、長期的にレイアウトを考慮すれば、さらなる経営成績の向上が期待できる。

最優秀賞・農林水産大臣賞

神奈川県三浦郡葉山町 三留 武さん（肉用牛肥育経営）

三留さんの経営は、三浦半島西北部の葉山町に位置する。

三留武さんは、昭和34年に就農し、42年から乳肉複合経営を開始し、48年から肥育専門経営に転換している。現在の労働力は、武さん、長女が中心で、妻や常雇が補助的な労働を提供している。黒毛和種の肥育牛140頭を常時飼養し、2,036万円の所得をあげている。

以下、経営の評価すべき特徴点をあげる。

第1に、家畜の飼養面において、「牛に飼われず、人間が飼う」というのが経営主の経営哲学である。飼料給与において、導入後1週間まで良質のチモシーのみ朝・夕に給与、その後1ヵ月まで、栄養のバランスが良い赤フスマを飽食給与、その後1週間で、自家配合飼料を給与して慣らしている。牛の健康管理に気を配り、事故が極め

て少ない。

第2に、もと牛の導入は、資金面での信用を保証するためJA組合長の署名文書を持参し、メンバーが直接購入している。子牛市場に直接立ち会い、もと牛の選定に最大の努力を払っている。

第3に、生産資材の調達面において、稲わらのロールを宮城県のコントラクターから個人相対で仕入れている。その際、コントラクター側の都合にあわせ調達するなど、両者の信頼関係を構築し、安定的な確保を図っている。

また、敷料に関しては、家屋の廃材を原料にしたチップクズを利用し、解体物処理業者3社から購入している。調達先を3者に分散させているのは、リスク回避のためである。金属クズの混入が若干あり、毎年4～5頭の牛が踏むが、導入後10ヵ月程度で削蹄師に見てもらって、大きな事故は回避している。

第4に、肥育牛の販売面において、「葉山牛」という名称でブランド化する。その後、マスコミで取り上げられたことで需要が増える。供給不足のため「三浦葉山牛」(A4以上)とし、三浦半島全体でブランド化に成功する。現在三浦葉山牛を生産するメンバーは12戸である。出荷は全部仲間内で協力して行っている。他のメンバーの牛を運ぶ際には距離に関係なく15,000円/頭の運賃をとるなど、合理的な仕組みを構築している。

A4以上の「三浦葉山牛」が出た時には、1頭2,000円ずつ組合に積み立てをし、60店の指定小売店から徴収する指定料3万円とともに広告費として活用している。

第5に、財務管理面では、平成12年にJAに相談し、もと牛貸付事業を開始している。組合員で連帯保証をとり、毎年1,800万円の融資を受けている。現在、1頭当たり30万円を上限とし、60頭の導入牛に対し融資を受けている。高騰しているもと牛を全額他人資本に依存するのではなく、一部自己資本で導入する仕組みにしているところは賢明といえる。

第6に、肥育牛の飼料の給食センターを利用者5戸で運営している。最も肥育成績の良い三留経営の飼料設計で生産している。設立当初から飼料内容の変更はなく、豆腐カス、ビール粕を利用した飼料を4割、穀類を6割で作っている。酢の添加による腐敗防止など工夫し、利用者の8割程度の飼料を安定的に供給できる仕組みを作っている。この取り組みによって、「三浦葉山牛」のレベルが高位標準化されることになる。

第7に、たい肥は良質なものを製造している。敷地内の無人販売所での個人向け販売と、JAを通じた耕種農家向けの販売が、2対6の割合で順調にさばっている。

第8に、経営の多角化の一貫として4戸共同でレストランを開店し、三浦葉山牛の評価を消費者から得られる仕組みを作っている。

第9に、豆腐カスの輸送費に対して、グループの12戸から徴収していた資金に多くの剰余が生じ、それを原資に近隣住民に三浦葉山牛を配付しているところも、このグループの優れた点である。

これらの活動は三留さんを中心として行われており、地域農業を引っ張るリーダーとしての機能がますます求められる。

最優秀賞・農林水産大臣賞

神奈川県横浜市 有限会社横山養豚（養豚経営）

有限会社横山養豚は神奈川県横浜市にある。

代表取締役の横山清さんは、昭和48年に就農し、平成15年に代表取締役になり、経営権も父から移譲している。現在の労働力は、清さん夫妻、長女、従業員4人であり、臨時的に長男と次男が手伝っている。繁殖母豚350頭を飼養し、3,205万円の農業所得をあげている。

以下、経営の評価すべき特徴点をあげる。

第1に、開放の離乳子豚舎の時に、豚胸膜肺炎で死亡が多かったため、ウィンドレス離乳子豚舎を平成8年に新築している。また、新築に当たっては、豚舎の大きさを試行錯誤で決定するなど、自己の経営に合致した豚舎にしている。

第2に、家畜の飼養面において、「胸の広い健康な繁殖母豚を作ることが肝要」と、「肉豚は子豚の時に腹を大きくする」をモットーにしている。配合飼料と未利用資源（菓子類・食品残渣飼料・スパゲティ・パンクズ）の割合を7対3の割合で給与するなど、地域資源の循環に大きく貢献している。ただし、未利用資源利用の給与は30～55kgのステージと限定し、健康で高品質な豚肉生産を目指し、銘柄化して販売している。

第3に、肉豚の販売面において、市場出荷と相対取引のウェイトが5対5であるが、市場出荷においては、買参人のニーズである、脂肪が美味しい・脂肪がのる豚肉の生

産を目指している。相対取引では、枝肉の全量買取で、価格は3市場（横浜・東京・大宮）の加重平均で決まっている。このように、良質の豚肉生産を目指し、多元販売をすることによって、価格変動のリスクを回避している。

また、一部ではあるが、中ヨークの純粋種とF1生産・販売にも取り組んでいる。

第4に、都市の中での大規模養豚経営ということで、環境に極めて配慮している点である。養豚農家3戸が任意組合を作り、補助事業でたい肥処理施設を建設している。できたたい肥は、JAへの委託販売と露地野菜農家への直売が、半々とのことであった。また、別の肉用牛と養豚経営からなる堆肥組合が、原料としてたい肥を求めている。また、尿は、横浜市水道局との交渉で、平成12年から下水道放流が可能になっている。このような横浜市の畜産経営の支援は極めて大きい。

また、豚舎にハエが少ないことが大きな特徴でもある。通路に毎日水を流し、ふんを溜めず、ウジがわかないようにすることがポイントとのことであった。

臭気除去のために、平成10年にオゾン発生装置、13年にコーヒー炭を飼料へ添加するなどの投資を行い、近隣の住民への配慮を怠っていない。

第5に、横浜市内17戸の養豚農家グループの情報交流を、積極的に引っ張っていることである。グループ内で豚肉の試食会を開催し、前述のコーヒー炭の飼料へ添加が、獣臭を抑える効果があることを明らかにしている。

第6に、農場が小学校のゆとり教育の場になるなど、畜産に対する理解の醸成に努めている。

第7に、清さんは本人は、情報交流や営業など週に2日、外へ出る機会が多いが、夫人は週に1日は休日をとっている。従業員は、近隣から通勤であり、月に6日の休日をとっている。また、横浜市の要請で、従業員の中で障害者を1名6年間雇用し、来年から一般雇用とすることは、大いに評価できる。

長男は、獣医師で他県で修行しているが、来年4月から本格的に就農する予定である。また、次男も大学で医療機器を専攻しているが、国家資格を持った上で就農予定であり、盤石な経営組織になる。それ故、さらにF1農場の建設を構想し、良質な繁殖もと豚の供給を目指している。

優秀賞・農林水産省生産局長賞

兵庫県多可郡加美町 (農) 箸荷牧場 (酪農経営)

箸荷牧場は、経産牛が 170 頭弱と大規模な酪農経営である。地域が水田地帯であり自給飼料基盤が脆弱であるため、購入飼料依存型である。しかし、仲間と指定配合で購入し飼料コストの低減を図ったり、敷料を使用せず、火力乾燥機による耕種ニーズに応じたたい肥化を行うなど、地域環境にうまく適合した取り組みを行っている。また今後、対策が求められるであろうパーラー排水の浄化処理に早くから取り組んでいる。これは、酒樽を利用した低コストなものである。さらに高齢化が進み労働力不足の地域の稲作農家の農作業オペレーターとしても活動するなど、飼料基盤はないものの地域と一体となって経営している。

優秀賞・農林水産省生産局長賞

愛媛県西予市 (有) 小野田牧場 (酪農経営)

小野田牧場は、県内でもいち早く、30 年以上も前に法人化とフリーストール・ロータリーパーラー方式を導入するなど大規模化に取り組んできており、その先進性に特徴がある。

搾乳中の牛以外は、放牧管理して個体の肢蹄強化に努めるほか、後継牛確保以外の種付けは牧牛利用による省力化への工夫がなされている。また、遊休地を活用した自給飼料基盤の確保、F 1 もと牛の安定供給、高齢者の雇用促進、良質たい肥はその 9 割を地域の耕種農家に還元するなど地域資源の循環・保全に貢献している企業と位置づけられる。

優秀賞・農林水産省生産局長賞

沖縄県宮古島市 (有) 大海 (肉用牛繁殖経営)

大海は、5.7 ha の飼料畑で飼料を 5 回転以上収穫し、粗飼料自給率 100% を達成している。なお、ロール・ラッピング作業は地域のコントラクターに委託を行い、経営の一部外部化による効率化と機械コストの低減を図っている。新技術の情報収集にも熱心で、超早期離乳を導入し、ボトルネックであった子牛の事故を克服している。また、経営のリスク分散と土地生産性を高めるために、経営は別であるが、施設野菜の

ピーマンに取り組むなど、地域における肉用牛を基幹としたモデル的な專業経営といえる。

優秀賞・農林水産省生産局長賞

新潟県村上市 漆間 平、マリ子さん（肉用牛肥育経営）

漆間さんの経営は、夫妻の労働力で、黒毛和種の肥育牛 85 頭を飼養するとともに、水稲 2.8 ha を作付けする複合経営である。有利販売を目指した「村上牛」の立ち上げと確立の中心となり活動してきた。村上牛全体の品質向上のために「村上牛配合」という、指定配合作りを行ってきた。自身の技術は県内認定も受けるほどで、地域の後継者や中核農家育成のためにおしみなく伝えている。このように地域のリーダーとして村上牛を中心にすえた活動は極めて評価できる。なお、この活動の裏には、「最良のパートナーとして、同等または経営主以上に経営に関わってきた奥さまの力」があってこそということを申し添えたい。

優秀賞・農林水産省生産局長賞

愛媛県今治市 本宮 環、章加さん（肉用牛肥育経営）

本宮さんの経営は、乳用種と交雑種の哺育・育成と交雑種(雄)の肥育経営である。ほ育段階は父と夫人が中心に酪農地帯である当地域旧来の施設で行い、その後の育成・肥育段階は本場で本宮氏自身が行っている。育成牛は地域の肥育経営へもと牛として、肥育牛は系統を通じての出荷となっており、肥育成績も近年平均で B - 3 以上が 8 割以上という高い実績を残している。また、コスト面については、古電柱を使用した牛舎、外皮や米ぬか等を中心とする安価な自家配飼料、製造堆肥と地元産稲わらの交換利用、肥育牛の徹底した個体管理など多様な取り組みが行われている。新・旧の飼養方式をうまく結合し、地域と調和したすばらしい経営といえる。

優秀賞・農林水産省生産局長賞

宮崎県児湯郡川南町 （農）尾鈴豚友会（グループ活動）

尾鈴豚友会は、昭和 54 年に設立され、現在は 6 名の構成で運営されている。主な活動内容は、飼料の共同配合と肉豚の共同出荷である。肉豚は地元の食肉センターで

処理され、主に北部九州の生協で有利販売されている。飼料配合面では、生産工場設置のもとで会員の飼料費の2割低減を実現するとともに、均質の肉豚生産を可能としており、その経済効果はきわめて大きいといえる。また、構成員個々の経営内容をすべてオープンにしながらの情報交換や地域活動も取り込んだ民主的な運営は、グループ活動のひとつのモデルとして位置づけられると考える。

優秀賞・農林水産省生産局長賞

長野県佐久市 (有)ブラウンエッグファーム(採卵鶏経営)

ブラウンエッグファームは、山の傾斜地という厳しい条件下で高床式鶏舎を設置し、7万羽の採卵鶏を飼養している。生産部門では、飼料や飲み水にこだわり、健康な飼養による安全な卵の生産に力を入れている。生産卵はスーパーを中心に生協、店頭、宅配、加工等と多様で飼養規模に応じた適格な販売対応がとられている。直売所ではいろいろな鶏種の卵を、また加工品は40種類以上を取りそろえ多彩である。雇用を創出するとともに、鶏ふんを供給した耕種農家の産直所としての機能も兼ねるなど地域にも貢献している。

優秀賞・農林水産省生産局長賞

三重県松阪市 山下盛通、恵美子さん(採卵鶏経営)

山下さんの経営は、消費者とのコミュニケーションを重視しており、販売は25%が小売、35%が生協である。最近、食育、食農という言葉が定着しつつあるが、注目されるはるか昔から取り組んできている。商品の命名を消費者から募集するなど、ユニークなマーケティングを行っている。この活動は、もともと裾物を売り切るために始めた取り組みだが、山下鶏園を特徴付ける活動となっており、顧客の獲得につながっている。昨今、ネット販売が注目されるが、このような近隣の消費者と直接対峙しての経営は、都市近郊採卵鶏経営の1つのモデルといえる。

また、地域の農家仲間との活動において、夫婦ともに中心的な活動を行っており、同地域で欠かせない経営となっている。